図書館司書課程における
オンラインレファレンス演習のあり方への考察
—ならびに近現代文学研究資料としての「月報」の価値—

中　西　　裕
加　藤　美奈子（就実短期大学）

概要

平成20（2008）年6月の図書館法施行規則（文部科学省令）の改正にともない、司書課程のカリキュラムが変更される。就実大学・就実短期大学図書館司書課程科目「情報検索と蒐集」では、新カリキュラムの内容を先取りしたオンラインレファレンス実習を授業内容に含んでいる。その事例報告と、司書課程における学習内容にITの功罪両面への目配りが必要であることを提言する。また、事例研究の過程から全集等に添付の「月報」の図書館資料としての意義についても言及する。

1.省令科目「情報検索演習」の検討

文部科学省令施行通知「図書館法施行規則の一部を改正する省令及び博物館法施行規則の一部を改正する省令等の施行について」（注1）で、司書課程の新カリキュラムが提示されているが、平成24（2012）年より実施される新カリキュラムでは、情報学分野関連の学習内容が質・量ともに強化されていることが大きな特徴であり、それを図書館サービスに有効に活用展開できる司書の養成が求められていることがわかる。

就実大学・就実短期大学の現行科目では、図書館に関する省令科目のうち「情報検索演習」（1単位）に該当する科目として「情報検索と蒐集」（2単位）を開講している。平成18（2006）年度より、就実大学・就

実短期大学では、「情報検索と蒐集」を4クラスに分け、2クラスを加藤が、2クラスを中西が担当している。まず、当該科目の学習内容検討の経緯をたどっておきたい。

加藤・中西の前任者である故・澁谷和人就実短期大学講師は講義用テキスト『情報検索ワークブック　1999年度「情報検索演習」』（注2）を編んでいる。同書の著された1990年代は、「情報検索の歴史は現在、インターネットの時代を迎え」（p.19）た状況にあり、「パソコン通信」と「インターネット」を比較した項目では、「インターネット　国内1000万」と利用者数が示されている（同頁）。また、現在のNIIがNACSISであった頃のWebcatの操作手順等が掲載されている（p.89）ほか、検索演習としてCD-ROM検索に一章（p.158-168）があてられている。

司書養成科目については、昭和25（1950）年の省令制定（「図書館法施行規則」）により最初のカリキュラムが示され、昭和43（1968）年の改訂を経て、平成8（1996）年の改訂により、カリキュラム全体が大きく変更された。今回（平成21年）の改訂は二度目の大きな変更となる。

「情報検索演習」は、平成8年の改訂による新設科目で、設置の意図は、「今日の情報化社会に対応するため『情報サービス概説』『情報検索演習』を設置し、情報関係科目の充実を図る」ものであった（注3）。

「情報検索演習」の新設により、その講義内容が模索された経緯が、竹内比呂也・原田茂治「『情報検索演習』のためのInternetの活用」（注4）から伺われる。同論では、「『情報検索演習』はオンラインデータベースやオンディスク（CD－ROM）データベースを用いた情報検索の方法を修得するものと言うことができる」と位置づけている。「『情報検索演習』実施上の問題点」として、「1）商用データベース利用にかかる経費が、通常の実習のために支弁されうる経費をはるかに越えるために実施不可能なこと」、「2）これらのデータベースでは、1IDにつき1アクセス可能が原則であるので、実習には学生数だけのIDを必要とす

る」、「3）（中略） CD-ROM データベースの導入も考えられるが、サーバの設置などの費用の問題点がある」、という3点が指摘され、結果「オンライン検索実習は、結局は教員のデモ検索を学生が見るという程度に終わってしまっているのが、司書養成機関の実情」と指摘されている。この現状を解決する方策として、「司書養成教育用のデータベースファイルを公的機関が安価に提供し（中略）かつ大量の同時アクセスに耐えるネットワークを構築すること」と、「適切な数のデータベースを含む安価な CD-ROM の発行」が期待されている。同論は更に、97年度からの演習科目開講に際し、「現実に存在する資源を使う効果的な教育方法」として、「Internet の利用」を提言している。

同論では、「OPAC は情報検索の対象とは通常考えられないかも知れないが、 OPAC の多くが雑誌論文の抄録・索引データベースを検索するための検索エンジンを基に開発されてきたことを考えると、情報検索のための実習の素材として充分に耐えうる」と紹介されている。インターネット上での「OPAC の利用」が「通常考えられない」状況にあって、当時としては先進的な教育内容を提言していることになる。

このような当時の状況を経て、90年代末から2000年代のテキストは、サーチエンジンの一例として「Yahoo」を紹介し、演習テキストに附属する練習用 CD-ROM のデータベースを検索し、「Webcat」を操作出来るレベルの演習を講義内容として提供するに到ったのだろう。

しかし、中西と加藤が「情報検索と蒐集」を担当し始めた平成18（2006）年当時はすでに、受講生は高等学校での「情報」を必修教科として学習している学年であり、インターネットは日常的なものとなり、「Yahoo」・「Google」等の検索サイトを頻繁に利用している状況にあった。加えて、90年代に指摘されていた、設備・機器等の問題点は、技術面の向上により解消されている。既に、 CD-ROM の検索はもとより、インターネット上に公開された「OPAC の利用」も司書に特化した情報技術ではなくなっていた。

ネット利用が一般化し高度化する中で、現状に即した新しい学習内容が必要であった。

2.実践報告（中西による）

中西担当の「情報検索と蒐集」他の科目について加藤が15回の授業の全てを観察評価し、授業内容の改善検討を行った。ここでは、平成20（2008）年度、中西担当「情報検索と蒐集」の概要と、特にオンラインレファレンス実習の事例について報告する。

各回の授業内容はおよそ次のようなものである。

回数	シラバス項目	概要
第1回	ガイダンス	学習の方向づけ
第2回	情報検索のいろいろ	最先端の情報検索
第3回	情報とは・情報の伝達とは	
第4回	インターネットのインパクト	Google、Amazon、Wikipedia 等
第5回	情報検索の基礎訓練（1）	情報検索のスキル
第6回	情報検索の基礎訓練（2）	情報検索の問題点
第7回	情報検索の理論	
第8回	Web 検索演習（1）	基礎編
第9回	Web 検索演習（2）	応用編
第10回	パッケージ型データベース	CD-ROM、 DVD-ROM
第11回	書誌情報のデータベース	NDL-OPAC、 WebcatPlus 等
第12回	書誌情報検索演習（1）	基礎編
第13回	書誌情報検索演習（2）	応用編
第14回	論文・雑誌・新聞記事検索	Cinii、聞蔵等
第15回	統計データの入手と加工	行政サイトからのダウンロードとグラフ化

授業の全体のストーリーとして、「Google ブック検索」に代表される IT の世界からの図書館の存在意義を脅かす事象に対して、図書館側は

どのような戦略を取っていくべきか、情報社会における図書館の存在意義とは何か、という問題意識を持たせることを強く意図した。

これからの司書養成に求められる学習内容は、単にカード型・冊子型目録に対する機械検索の優位性を認識すればよいといったシンプルなオプティミズムによるものではなく、書籍とオンライン情報リソースとの両方の特性を理解し、書籍もオンライン情報リソースも客観視して相対化する能力の養成を目指すべきものであると考えている。

ここで、書誌検索課題（オンラインレファレンス実習）の展開例を示したい。授業は毎回 LMS （Learning Management System ; Blackboard Learning System）を使い、課題・資料の提示や評価を行っている。

【課題例】

○小学校の教員です。4 年生を担任しています。通知表の所見欄を書くのが大変です。なにかいい本ありませんか？

○トーマス・ハーディの作品に「第三の男」とかいうのを探しています。題名は間違っているかもしれません。

○壺井栄の作品で「親のない子と子のない親と」というような名前のものがあったように思うのですが、探してもらえませんか。作品名には自信がないんですけど。

これらのレファレンス課題に対して、受講者は指定されたオンライン書誌データベース（NDL-OPAC や Webcat）を利用して検索を実行し、最適と思われる回答（書籍）について、「タイトル」「著者名」「出版社名」「出版年」「ISBN」を記載し送信する、という形で課題演習が行われる。この中で、壺井栄作品の例を挙げて実際の授業展開を紹介しよう。

この設題には二つの学習ポイントが隠されている。一つはデータベースにおける「壺井栄」の表記の問題である。NDL-OPAC においては「壷井」と「壺井」とはシソーラス扱いでどちらもヒットするが、

Google ではそうでない、といった、データベースごとの異なりを学習する。

もうひとつは（こちらが重要なポイントだが）、提示されたキーワード「親のない子と子のない親と」には思い違いによる誤謬がふくまれており、これを回避することである。学習者は、機械検索によれば不完全な情報から正しい検索結果に至ることができることを学習する。指導者の想定した正解は『母のない子と子のない母と』であるが、与えられたキーワードに誤りがある前提で、キーワードの各所を削りながら何度も検索を実行することで、正解を導き出すことができるのである。

ところが、実際の授業展開の中では毎回少数の受講者が回答として壺井栄著『右文覺え書』（初版昭和26年）（注5）を挙げる。なぜかといえばこの本は昭和28（1953）年の再版（注6）の際に「親のない子の母となりて」という副題が添えられることになったからである。『母のない子と子のない母と』は『二十四の瞳』と並ぶ作者の代表作のひとつであるが、ほとんど知られていない『右文覺え書　―親のない子の母となりて―』も、設題の趣旨からして不正解とは断じ難い。そこで、この書についてさらに調査することで、情報検索の諸相を感得させることとした。

学生の手元のモニターには、指導者の PC 画面の映像が出力されている。指導者は LMS 画面上で匿名で全員の回答を表示し、それぞれの回答について検討し、その中で『右文覺え書』の回答に着目させる。「これ、どんな本だろうね」という素朴な疑問からはじまって、この本についてネットでどこまでわかるかということを実際に検索して見せることとした。このとき、受講者ひとりひとりに検索させる方法もあるが、それでは偶然の要素が強くなりすぎる。実は指導者は事前に一度検索した結果を見せている。偶然的な要素がありながら、しかし教授意図に適った学習の流れを「作る」ためには、そのような準備と配慮が必要である。

まず、NDL-OPAC や Webcat Plus などのオンライン書誌データベースではほとんどその内容に迫ることができなかった。そこで、

Google を使った Web 検索で「右文覚え書」をキーワードとして検索したところ、東京のオンライン古書肆「海ねこ」の壺井栄特集ページ（注7）がヒットした。このページには、『右文覚え書』の昭和26年本、同28年本の両方の販売広告が掲載されており、表紙写真とともに内容紹介や帯やカバーの宣伝文句も引用されていた。昭和26年本には「戦争で置き去りにされた少年・右文（みぎふみ）の育て親としての手記。」とあった。また昭和28年本の帯からの引用として「戦争の置き去りにした赤ん坊のひとりが仕合せに育ったという事実は戦争の悲劇に抗議する強い愛の行為の勝利である」という佐多稲子のコメントも見える。これによって「右文」は「みぎふみ」と読み、子供の名であること、おそらく戦争孤児である右文を壺井がひきとって育て、本書はその手記をまとめたノンフィクションであるらしいことがわかった。

次に「岡山県図書館横断検索システム」（注8）を使って「右文覚え書」を検索すると、岡山県立図書館に書庫本として昭和28年版があることがわかった。早速借り出して授業に持参し、内容を紹介した。

右文ちゃんは当時1歳の男児で、壺井の縁者の子、父は新聞記者として大陸で死亡、母も終戦まもなく死亡し、孤児となった。右文という名は「右文左武（文を右にし武を左にす）」つまり文武両道を尊ぶ（もしくは武より文を尊ぶ）という意の漢語に由来し「文学を尊ぶということ」として自らもペンを執る人である亡父が名づけたものであることがわかった。壺井は同書「まえがき」で次のように述べている。

> いかなる女性も母性足りうること、愛情が血肉とのみつながつたものではなく、一つ家にもみ合つて暮すことによつて生れるという事を強調しようとした。しかしこれは私のひとりよがりかもしれぬ。
>
> 『右文覚え書』（昭和28年、三十書房、常用漢字に改めた）

これで『右文覚え書』の何たるかは明確になった。ここでさらに、受

講者に対して指導者はこのように疑問を投げかけた。「……ということは、壺井右文さんという人がいるということだね？　もしかしたら、お父さんの名付けのとおり文学者や新聞記者になっているかもしれないね」

そこで、今度はGoogleの検索窓に「壺井右文」「壷井右文」を入力して検索してみた。すると、「壺井右文」はヒットなし、「壷井右文」にヒットしたページもたった一つで、大阪府立国際児童文学館のページ（注9）のみであった。このページの情報によると、昭和39（1964）年講談社刊の『壷井栄児童文学全集』第3巻の月報に壺井右文という人物が「母のこと」と題する一文を寄せているらしいことがわかった。これ以外に、書誌データベースの著者名として検索しても、オンラインリソースから壺井右文氏の名前を発見することはできなかった。

そこで、『壷井栄児童文学全集』を岡山県図書館横断検索システムで検索してみたところ、県内唯一のヒットが津山市立図書館で、『定本壷井栄児童文学全集』全4巻が所蔵されていることがわかった。しかし『定本壷井栄児童文学全集』は昭和54（1979）年の刊行であり、昭和39（1964）年の『壷井栄児童文学全集』とは内容的にもおそらく別物、月報の内容も当然相違するものと思われた。（念のため後日、岡山県立図書館を介して津山市立図書館に電話で照会したが当該の月報は保存していないとのことだった。）

そこで次に、NDL-OPACで昭和39（1964）年版の『壷井栄児童文学全集』を検索すると、当然のことながら所蔵されていたが、それだけでなく全集本体以外に「壷井栄児童文学全集 月報：第1巻～第4巻」とのエントリーが表示された。授業準備の折にこれを初めて見つけたときには、鳥肌が立つような感動を覚えたものである。授業で受講者にこの検索過程を再現して見せ、図書館の職員が全集の月報を合冊整理して利用可能な状態にしたその発想と労苦を司書課程履修者としては忘れてはならないということを、熱く語ることとなった。

これには実は個人的な関係もあり、中西にとって大学院のゼミの後輩にあたる中込重明君（近世文学研究で博士号を取得直後39歳の若さで物故）が生前、アルバイト職員として国会図書館でまさにこの全集月報の合本整理の仕事を担当しており、「壷井栄児童文学全集月報」も彼の手になるものだったとの話を、このとき知り合いの国会図書館関係者から聞かされ、実に不思議な縁をも感じていた。この話も授業で付け加え、オンライン情報でも冊子の情報でもない、いわば「人から得る情報」というものもあるのだということを意識させる機会とした。

壺井右文氏の名で公表された、おそらくは唯一かと思われる文章の所在が明らかになったので、国会図書館からそのコピーを取り寄せ、「母のこと」の全文をプリント教材にして受講者に配布した。その冒頭には「わたしは母とともに十九年間おなじ屋根の下にくらしてきたわけだが」とあって、終戦当時1歳であった右文氏が20歳前後で執筆した文章であることがわかる。さすがに母親の影響か、長い文章を達者に書きこなしてはいるが、文脈の整合性などには子供らしい未熟な部分も多く見受けられる。しかし、その素朴な文章の中にも、育ての母への感謝や、健康を害した母への気遣い、それゆえに気弱くくどくなって自分の行動を束縛してくる母への不満なども素直に綴られていて、血を分けた親子となんら変わることはない、いわば「ごく平凡」な親子の有様をも垣間見ることができる。「愛情が血肉とのみつながつたものではなく、一つ家にもみ合つて暮すことによつて生れるという事」が、壺井家においてしっかりと具現されたのであろうことが伺える資料である。

この学習過程は、オンライン検索から図書館利用、人づての情報まで含めて多彩な情報源を駆使しての情報検索の実例を受講者に示すこととなった。この過程で学習者は「インターネットに何があるか」「インターネットに何がないか」「図書館に何があるか」「図書館に何がないか」の諸相について、実感をもって接することができたはずである。

3.観察報告（加藤による）

情報学を専門とする中西の「情報検索と蒐集」を平成18（2006）・平成20（2008）年度に全回参観を許されたことは幸甚であった。加えて、平成18（2006）年度「情報メディアの活用」（司書教諭必修科目）、平成19（2007）年度「情報と社会」（総合教養教育科目）の全回参観の機会も与えられた。FD活動が重視されつつある近年においても得難い機会であった。「情報と社会」は、中西が既に報告しているように（注10）、教員・学生の双方から要請の高い携帯端末の利用を試みた科目であった。以下、「情報検索と蒐集」を中心に、中西担当の科目に一貫して言い得る特色を3点挙げたいと思う。

(1) IT化の功罪両面からの考察の提示・要請

Googleで検索すればわかるレベルのことを掲示板などで質問すると、「ググれカス」と罵倒を浴びせられるのが昨今のインターネットだという（注11）。このネット上の「常識」に違和感を覚える若い世代がいても不思議はない。加えて、ネット犯罪・ネットいじめ等の問題点をのみ強調する報道が日常的にされている昨今、「情報」という教科がいかに必修化されようとも、高度情報化社会に「ついていけない」と知識・技術の取得から離脱することも当然あり得る事態であろう。

実際、「アナログ人間ですから」と衒いなく発言する学生が今もって一定数存在する。講義での課題提出・就職活動等において、メールへのファイル添付、電子書類の提出など、現に対応を求められながらも、「出来ない」に続けて発せられがちなのが「アナログ」宣言である。

中西は、複数の講義の中で、「アナログであることが純朴で人間的だ、というニュアンスで発言していないか」ということを受講生に問いかける。講義では、「功罪両面への考察」の必要性が強調されているが、それはITに限ったことではなく、例えば、「自宅通学と下宿の利点と欠点」など卑近な例を比喩として挙げながら、日常生活全般や抽象的な議

論にいたるまでの、基本的な発想力として求められていたことが印象に残る。

2008年度の「情報検索と蒐集」では、第2回目の講義において、NDL（国立国会図書館）の2枚の写真を示した。1枚は、同図書館2階ロビーで、検索用の「カードボックス」が写っている。『国立国会図書館50年のあゆみ』（注12）からの複写であるという。もう1枚は、同じ場所に、整然とパソコンの端末が並んでいる「現在の写真」である。この2枚の写真から「この講義内容に関して読み取ったこと」の記述が課された。受講生の回答に先立ち、単なる「便利さ」ではなく、「便利さの質」を書くよう促し、「高速化以外に何があるのか」と板書した。

同時に口頭で、上記の写真の出典について、当初、NDL参考係で「見つけることは難しい」との回答であったものが、改めて別ルートで問い合わせたところ複写が送られて来た経緯などが説明された。「現在の写真」は、NDLを訪れれば現在誰もが目にし得る光景であるが、改めて画像資料として示すための「手続き」となると意外にも煩瑣なものとなる。まして、過去の画像資料の必要に迫られた時、Web上のOPAC検索等で、今回の写真1枚に到達し得ることは困難である。写真2枚を示すまでの担当者の苦心そのものが、「情報検索」の問題点を示す教材ともなっていたことになる。

講義では続いて、「①図書館が、いかにIT化するか」、「②図書館は、IT化では出来ない何をになうのか」という中心的な問題提起が示され、「非IT」の部分での図書館の役割はいかなるものか、またいかに生き残るのかを問いかけた。この2つの視点による考察は、講義で得た「ITで出来ること」の知識を前提として、「インターネットで何が探せないか」・「インターネット上では把握しきれない情報の価値・有用性」に学生に気づかせることへと繋がる。

後者の例として最も端的に示されたのが中西の報告にある「『壷井栄児童文学全集』第3巻　月報」にまつわる経緯であったと言えよう。今

回の月報を巡る一連の経緯は、Web上の情報の有効性と、それ以外の検索調査の必要性の両面を示す結果となったことが興味深い。受講生が、週ごとに展開される、この壺井栄と「月報」を巡る一連の発見の「続報」に、大きな関心を寄せていることが看取された。

「『壷井栄児童文学全集』第3巻の月報」は、国分一太郎「壺井さんの文学と教育性」、坪田理基男「『二十四の瞳』を連載したころ」、そして壺井右文「母のこと」を掲載している。最後に「本巻の画家紹介」の項があり、「及部克人」・「太田大八」・「富永秀夫」の三名の画家が顔写真とともに紹介されている。

「国分一太郎」は、NDL-OPACで検索すると、個人著者標目には生没年が「1911-1985」と示され、検索すると共著も含め、150件が示される。『新しい児童像と教育』(誠信書房　1958) 等の著書がある。この月報でも、壺井栄の文学が、「(1) 人々をゆたかにするもの　(2) 人々の意識を新しくするもの」という両方の「教育性」を備えていることを述べている。

「坪田理基男」は、同文中に「壺井先生はどうかと、父 (坪田譲治) にきいたところ」という一文が見られることから、坪田譲治の子息であり、NDL-OPACで検索すると、大正12 (1923) 年生まれ、『一本のビワの木』(高橋書店　1975) などの童話の実作者でもあることが解る。

「月報」では、「二十四の瞳」が、「『ニューエイジ』という月刊雑誌に連載された」いきさつが語られている。「そのころ井上靖先生の『霧の道』という三回連載の小説が好評のうちに完結することになり」とあるように、井上靖の連載の後、編集者であった坪田理基男が、壺井栄に新連載を依頼したという。その際、理基男の父である坪田譲治の意見を求め、「それは最適だということで」決定した、という経緯も、壺井栄の周辺作家からの評価の伺われる重要なエピソードである。他にも、「さしえは、壺井先生のご希望で森田元子先生におねがいしました」等、壺井栄自身の考えの伝わる部分もある。さらには、次の引用に見られる

ように、「二十四の瞳」の成立と受容に関わる重要な証言も示されているのである。

> そのころの「ニューエイジ」は、キリスト教の家庭雑誌でしたが、宗教色のすくない上品で清潔な編集をしていました。(中略) 小説の舞台としては、宗教雑誌というあまりめぐまれた舞台でなかったので、連載中は、かぎられた読者層の中でしか読まれず、かくほうの壺井先生にしてみればものたりなかったのではないかと思いました。(中略) その後、「二十四の瞳」が光文社から刊行され、また映画化され、壺井文学の代表作として、一般世間にその名声を博するにおよんで、新星の発見者でもあるようなきもちで、おおいにほこりとしているしだいです。
>
> (坪田理基男「『二十四の瞳』を連載したころ」)

わずか8ページの失われやすい体裁の「月報」であるが、壺井栄に関連する児童文学の研究、ひいては、雑誌「ニューエイジ」、坪田譲治・井上靖について知る上でも、重要な資料として位置付けられる。このように貴重な資料が、図書「本体」に比して、保存・検索、そして利用の面では、必ずしも十全の状態にあるとは言えないという、今回の講義の経緯を通して知り得た事実は、司書を志す受講生にとって、貴重な学びとなったと言えるだろう。

(2) 即時性のある教材・資料の提示

情報の「鮮度」という点において際立っているのもこの講義の特色であろう。講義への導入の話題としてしばしば、「今朝の新聞」が引用されていたことが印象深い。

平成20 (2008) 年度、第5回目の講義では、同年10月27日付「朝日新聞」の記事「女子学生2000人情報流出　明治安田生命の採用担当 PC か

ら」と、講義当日である10月28日付同紙の続報記事「女子学生情報、新たに7000人分　明治安田生命から流出」が紹介された。就職活動という学生にとって身近な話題で、かつ非常にタイムリーな事件として、受講学生の関心が引き付けられていることが伝わってきた。また、「続報」によって、情報流出の規模が異なっていたことが確認されるなど、普段あまり新聞記事を読まない学生にとっては、記事の読み方の提案にもなり得ていたと思う。この記事を導入に、「ファイル交換ソフト」の仕組みを図示、「Winny」による過去の事件にふれつつ、ここでは特に問題点について解説、USB の暗号化など、機密性のあるデータの取り扱い上の技術面での対策にまで言及されていた。

VTR 資料も同様に「鮮度」が高く、前日夜のニュース映像が1限のこの講義で早くも紹介されることもあった。

平成19（2007）年9月10日に放映された番組「カンブリア宮殿」の映像も、当時話題となった内容である。「Google」の日本法人社長が登場し、「世界をインデックス化する」等の発言に驚かされる内容であるが、Web 検索が「言葉（＝検索語）をめぐる争い」であることが端的に示される有効な「教材」となっていた。VTR の解説後、実際に「Google」の検索画面を示し、「アドワーズ広告（検索連動型広告）」がやはり「言葉をめぐる争い」であることの解説、さらに図書館と関連の深い「Google」の提供するサービスについて解説が加えられた。

「Google ブック」のサービスを紹介する中で、著作権切れの書籍が総て電子化され、Web 上で閲覧出来るようになる可能性にふれ（後に Google は著作権保護期間終了前の「絶版になった出版物のネット公開」という方向に進む）、また「村八分」ならぬ「Google 八分」という俗言を引きながら、一つの企業が Web 上の検索の方向性を統括することの問題点についても言及、「功罪両面」への目配りはここでも意図されている。

(3)　技術面でのフォローアップ

講義初回、「受講前アンケート」により受講生のスキルやネット利用状況が把握されている。LMSのアンケート機能の利用により、講義内で即座に傾向分析をした上で、第1回の講義内容が展開され、その即時性に学生が驚く場面もあった。

平成19（2007）年度は、受講生の「PCスキルの平均化」として、タイピング・PCの画面名称の確認という基礎作業から開始された。基礎的な技術では問題のない学生にも、Web上のタイピング練習サイトの紹介を交えるなど、以降のWeb利用の講義内容への導入が初回から示されている。平成20（2008）年度の初回は、「Google」の「ストリートビュー」機能を紹介、航空写真・海外の鮮明な画像に、初めて「ストリートビュー」機能を知った学生がどよめく一場面もあった。同時に、「プライバシーの問題」という側面にも言及され、「功罪両面」に問題意識が向けられる工夫はここでもされていた。

「書誌検索課題」の実践においても、Web情報をワード文書へと引用する場合、「形式を選択して貼り付け」て、テキスト文書としてペーストするなど、学生が意外に知らない小さなテクニックが実践的に積み重ねられるヒントが示されている。講義の後半においても、ネット上の「総務省統計局」の統計データを検索し、エクセルで加工する作業を手順を追って詳細に説明するなど、講義の展開に即して随時、学生が実践的に技術を習得出来る内容が組み込まれている。

(1)で言及したように、学生の「アナログ」発言を単に批判するのではなく、そのような苦手意識を持っている学生を、技術面でフォローすることに実践的に取り組んでいることも、最後に特色の一つとして加えておきたい。

4.図書館資料としての「月報」

今回の授業実践で取り上げた「月報」について、図書館資料としての

の扱いがどのようなものであるか、ここで確認しておきたい。「図書館資料論」のテキストの一つでは次のように「月報類などの挟み込み資料」の取り扱いを説明している。

> シリーズ物や全集などについてくる月報類はそのままにしておくと紛失しやすいので、装備のときに本体の表紙裏に貼付する。ページがかさばる場合は別扱いにして保存して、全巻がまとまった時点で製本し、独立した図書として扱うとよい。付録として挟み込まれてくる図表、地図なども、やはり表紙の裏に貼るか、表紙の内側にポケットを作って差し込んでおく。
>
> (河井弘志編『新現代図書館講座8　図書館資料論』東京書籍 1998 p.139)

実際、「月報」の表紙裏への貼付や表紙内側のポケットへの差し込みの形は図書館でよく目にするものであるが、後者は装備してもなお、紛失の可能性が高いのではなかろうか。公共図書館・大学図書館での「月報」の取り扱いの実情は改めて調査したいが、「全巻がまとまった時点で製本」という作業は、実際にはどの程度実施されているだろうか。「『壷井栄児童文学全集』第3巻の月報」が入手困難であったことも、この「月報」という図書館資料の「装備」の差異に起因するものだと言えるだろう。

国立国会図書館の Web サイト内「リサーチ・ナビ　調べ方案内」に、「全集月報・付録類」(注13) の項目があり、「当館では1950年代以降の月報を本体とは別に保管し閲覧に供していましたが (ごく一部、戦前のものもあります)、2001年から、全集などの本体に貼付して保管し、閲覧に供しています」と記されている。また、「2001年7月以降に受入れたもの」の月報については「図書の付録として、全集各巻に貼付」という保管方法をとっており、検索については、

・NDL-OPAC

タイトル欄に「全集名△月報」と入力してください。月報が添付されている場合には、各巻の書誌情報の付属資料欄に、「月報」の記載があります。

と示されている。すなわち、近年では総ての月報類が、それぞれの図書に貼付され、NDL-OPACによる検索に一本化されているのである。一方、「2001年6月までに受入れたもの」については「全集本体とは別に合冊製本」され、検索方法は、以下のように示されている。

・NDL-OPAC

タイトル欄に全集などのタイトルを入力してください。「(個々の全集名) 月報 (しおり、付録)」など、月報についている言葉で絞り込むこともできますが、月報固有のタイトルでは検索できない場合があります。(中略)

・『国立国会図書館所蔵全集月報・付録類目録』　国立国会図書館1996 (UP52-G1) 東京本館人文総合情報室開架

収録対象：1994年1月までに完結した全集

排列：分類順 (日本十進分類法)〉書名五十音順

索引：書名

・「全集月報・付録」カード目録 (東京本館人文総合情報室 備付け)

タイトル順・請求記号順で検索できます。

上記がまさに、「『壷井栄児童文学全集』第3巻の月報」の保管されていた状況であったことが解る。

ただ、『国立国会図書館所蔵全集月報・付録類目録』、NDL-OPACのいずれも、「壷井右文」の名で検索することは不可能で、他の著者名や月報の記事内容を確認することが出来ない。

5.まとめ

就実大学・就実短期大学図書館司書課程「情報検索と蒐集」におけるオンラインレファレンス実習の事例から、新時代の司書養成に必要な学習内容を見てきた。これからの学習内容は、これまで強調されてきた、図書館のIT化に対応するための情報技能と知識の獲得だけではもはや不十分である。「インターネットに何がないのか」といったITの現状の限界と問題点を強く意識し、また社会のIT化が「調査」や「読書」の様態を変容させ図書館の存在意義そのものを危うくさえしている現状にも目を啓き、そのうえで新しい時代の図書館サービス、すなわち多様な利用者のフェイズやニーズに応じることのできる高いレファレンス能力を獲得させることが必要である。オンライン、オフラインの両面を駆使し、しかもドキュメントサーチに終始しない広範なレファレンス実習が、今後ますます必要性を増してくるだろう。

また、全集等における「月報」がその高い資料的価値にも係らず、図書館資料として必ずしも十分に整備されておらず、いまだ有効に利用できる状態になっていない現状も指摘した。これについては、また稿を改めて考察したい。

《注》

1. 「図書館法施行規則の一部を改正する省令及び博物館法の施行規則の一部を改正する省令等の施行について（通知）」(2009.4.30)
2. 澁谷和人 1999
3. 菅原春雄「司書講習の現状と問題点」(「文教大学女子短期大学部研究紀要」40号 1996 p.37-48)
4. 「静岡県立大学短期大学部研究紀要」第10号 1996年度 p.95-106
5. 光文社
6. 三十書房
7. http://www.umi-neko.com/2007/tsuboi/tsuboi.htm 参照 :2009年9

月17日
8. http://oudan.libnet.pref.okayama.jp/ 参照 :2009年9月17日
9. http://www.iiclo.or.jp/htdocs_old/nenpyo.htm 参照 :2009年9月17日
10. 中西裕「大学授業のための携帯端末を利用したレスポンスアナライザの開発」(「就実論叢」第38号 2008 p.107-121)
11. 中川淳一郎『ウェブはバカと暇人のもの』(光文社新書 2009)
12. 国立国会図書館 1998
13. http://rnavi.ndl.go.jp/research_guide/entry/theme-honbun-101043.php 参照 :2009年11月11日